

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520977

研究課題名(和文) 伝承主体における伝承の主体化・内面化についての民俗学的研究

研究課題名(英文) Folklore Study of Subjectification and Internalization in Subject of Tradition

研究代表者

徳丸 亜木 (TOKUMARU, Aki)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90241752

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：現代日本の民俗社会において、民俗文化に関わる伝承がいかに継承され、再構築され、また創造されているかについて、民俗学的フィールドワークにより実態調査を行い、今日における伝承のありかたを映像、録音記録を伴った稠密な資料として記録・整理するとともに、伝承主体論の立場から「伝承主体」(伝承を保持する人々)による伝承の「内面化」と「主体化」の過程を、分析的に考察し、伝承が今日の地域社会やその社会に生きる人々に果たす有意性を検討した。

研究成果の概要(英文)：Research results of this study is described below. How inherited traditions related to folk culture in modern Japan folklore society, rebuilt, or also created by folklore fieldwork, and to record and organize materials by video and voice recording handed down. Further, from the viewpoint of "subject of tradition"(people to keep the tradition), I discussed process of "internalization" and "subjectification" of tradition. To examine them in mind, I have what does it means for to people living in today's communities and society.

研究分野：民俗学

キーワード：民俗学 民俗の動態的記録 伝承論 伝承主体 主体化 内面化 語り 民俗文化財

1. 研究開始当初の背景

本研究は、現代日本の民俗社会において民俗文化に関わる伝承がいかに関承され、再構築され、また創造されているかについて、民俗学的フィールドワークにより実態調査を行い今日における伝承のありかたを映像、録音記録を伴った稠密な資料として記録・整理し、伝承主体論の立場から伝承主体（伝承を保持する人々）による伝承の「内面化」と伝承主体の「主体化」の過程を、分析的に考察し、伝承が今日の地域社会やその社会に生きる人々に果たす有意性を検討し、民俗学研究に資することを目的とするものである。

民俗学は、ある民俗文化の古態を探り、日本文化の本質的な部分を探ろうとする傾向を有す。この傾向は、学問の成立から考えても否定されるものではなく、非文字により継承される日本文化の特質、価値を究明する上でも有効なものであると考えられる。しかし、同時に、民俗学がその研究資料とする伝承は、固定化した静的なものではなく、現代社会に生きる人々が、その内面で保持し、生活の様々な側面で、言葉や行為としてお互いに伝えあい、さらには次世代に継承されて行くものであると考えられる。伝承は、それを保持し、伝えて行く人々 伝承主体の生活と密着しており、常に動態としてあるものと考えられる。本研究では、伝承を動的なものとして把握し、その継承、再構築、創造に関わる動態を分析的に記述することを試みる。

2. 研究の目的

本研究では、今日の民俗社会において伝承をささえる伝承主体を幾つかのレベルで想定し、そこにおける伝承の継承、再構築、創造のありかたを分析的に検討することを試みる。ここで想定される伝承主体は、伝承行為を行う個人、その個人が帰属する最も基本的な社会単位である家、村や浦、町など地域社会、あるいは、漁撈組織など生業組織などである。伝承主体の概念は、いまだ民俗学研

究において十分な検討が成されているとは言えないが、今日の民俗学研究や社会学、人類学、宗教学など関連領域においては、ライフストーリー研究やエスノメソドロジー、あるいはナラティブアプローチなど、いずれも個人に接近したフィールドワークによる研究と分析とが進められており、学界の大きな潮流を成している。伝承主体論に着目した本研究は、上記の研究とも関連しつつ、内面化を、「外在化・客体化を経た伝承・民俗が伝承主体の生活の中に再定位され、意味づけられ、一定の規範性を獲得する過程」として概念規定し、ある伝承主体が、伝承を継承する過程において、いかにそれを内面化し、主体化するかに特に着目し、フィールドワークに基づく実態調査と帰納的分析から検討する。

3. 研究の方法

以上の目的を踏まえ、本研究においては、伝統的城下町、山村、農村、漁村、島嶼など環境条件に特徴がある幾つかの地域を主に山口県内をフィールドとして選定し、そこに生活する人々を対象とした民俗学的調査を実施する。調査においては、個々の話者の語り、祭礼・行事等における人々の行為を録音・撮影機材を用いて記録・整理し、それに基づいて現代社会における伝承主体のありかたと、伝承の継承、再構築、創造の実態を把握した。更に、伝承の内面化・伝承者の主体化のありかたを、特に人々の語りや行為への表出から分析した。調査地は、申請者が以前、調査を実施した地点から基本的に選択しており、当時の調査データをアーカイブ化する作業を経て、今回の科研調査によるデータとあわせて用いることとし、数年から25年程にわたる通時的な考察を可能とした。

また、伝承主体を取り巻くコンテクストを、共時的な社会関係や生活に関わる地理的・生態的環境条件からのみ考察するのではなく、ある個人や家、地域社会が背負う通時

的・歴史的環境条件からも考察した。特に個人や、家の伝承を考察するに際しては、その生活体験の内省的叙述（物語化）である生活史の記録も作成した。

現代社会において、特に地域を単位として維持される伝承については、民俗文化財としての指定などを通じて、行政や外部社会との関わりにおいて資源化される場合も多く、対象地域をとりまくその様な状況についても十分に踏まえた考察を行うことで、伝承主体を取り巻く外部的要因が如何に伝承の内面化と主体化とに影響を与えるかを考察した。

さらに日本の近代化過程における植民地政策により、韓国への移住者を出した漁村も対象地域のひとつとして選定する。そこにおける伝承の継承、再構築、創造の過程を見ることにより、移民経験者を伝承主体として見る研究視角の有効性を探った。

以上により、現代に生活する人々にとって、民俗と伝承が如何に意味あるもの出来るかを具体的に論じるための基礎的な資料を構築した。特に、高齢化が進む日本社会において、厚い伝承を保持している地域の高齢者達を今一度、伝承主体として位置づけることにより、彼らの存在が社会的に如何に重要であるか、伝承の継承、再構築、創造が高齢者の精神的生活に如何に役割を果たし得るかを民俗学の視角から提言出来るものと考ええる。

4. 研究成果

以上を踏まえて、本科研では、期間中に以下の地域において民俗調査を実施した。

(1) 民俗と内面化について

1) 祭礼行事を担う個人と家、祭礼集団における伝承の内面化に関する調査 山口県萩市内地蔵盆行事調査

萩市では、8月24日に市内各所の寺院、地蔵堂で地蔵盆が行われている。寺院によっ

ては、多くの参拝者を集めており、飲み物などご接待を行っている。郊外の農村地区においても地蔵盆は盛んであり、主に、現在でも女性達が集まる結衆の場として機能している。町内や集落を単位として行われる地蔵盆でも、地区の住人達が菓子や料理を準備して御接待を行い、地蔵には化粧を施す。今回の調査では、平成25年8月24日の萩市市内寺院、ならびに各集落の地蔵盆の現況をデジタルカメラで撮影するとともに、デジタルビデオによって撮影・編集し映像記録を作成した。

山口県萩市内節分行事調査

萩市の町内、あるいは各集落では、節分にはトベラの枝にヒイラギの葉を飾った厄除けを門口に立て掛ける。3日の夜には、その下で、その年に数えて厄年となる者が年の数の大豆と女性の櫛から集めた毛髪、味噌などを混ぜて焼き、その臭気で厄を追い払う。また、節分には小さなものと大きなものを食べなくてはならないとされ、鰯と鯨が食された。海から離れた農村にも当日には行商が鰯と鯨肉を売りに来た。使い古した草履など汚れたものの上で毛髪や大豆を焼く例が現在でも見られるが、今日では草履を使わないため軍手などで代用されている。今回の調査では、平成25年2月3日における農村集落での節分行事のありかたをデジタルカメラで撮影するとともに、デジタルビデオによって撮影・編集し映像記録を作成した。

2) 行政による伝承の観光資源化と伝承の内面化に関する調査

萩市浜崎町住吉神社夏大祭調査

萩市住吉神社では、現在8月1日より4日にかけて、夏大祭が行われる。各町内からは、巨大な提灯を乗せた山車が出され、また芸者の手踊りを乗せた踊車も町を練り歩く。神輿は、神殿を出た後、萩市内の氏子町内を巡航し、4日の深夜、神輿上げで神殿に還御する。また、お船謡を奉納する船形の山車も町内を

巡回する。この船形の山車は、萩藩藩主の御座船を象ったものと伝えられる。また、御座船の船上でお船謡舳子組が謡うお船歌は県指定重要無形民俗文化財に指定されている。今回の調査では、平成 25 年 8 月 2 日から 4 日の祭礼をデジタルカメラで撮影するとともに、デジタルビデオによって撮影・編集し映像記録を作成した。

山口県萩市椿金谷天神秋例祭調査

萩市椿金谷神社の秋期祭礼は、11 月第二土日に実施される。大名行列に模した神幸の行列が組まれ、毛槍や道具類の儀礼的な受け渡しが行われる点や、かつての社地である古天神まで御祭神の御霊が御網代と称される牛車に遷されて巡幸する点、農村部からの馬の背に飾られた伊達小荷駄（ダテコンダ）と称される飾りの奉納される点などに大きな特徴がある。2013 年度は、豪雨のため、牛車による古天神への御神幸神事は取り止められた。今回の調査では、平成 25 年 11 月 10 日の祭礼をデジタルカメラで撮影するとともに、デジタルビデオによって映像記録を作成した。

なお以上の萩市の祭礼行事については、1992 年以降に申請者が記録した関連資料のデータベース化を並行して行った。

3) 離島の祭礼行事における伝承の内面化についての調査

山口県萩市大島年祝い行事調査

萩市大島は、萩市に北、4 km 程の海上に位置する離島である。萩市大島は、現在、極めて活発に漁撈活動が行われている漁村であり、また、共同体による厄払い儀礼である年祝い（厄年を迎えた者達が島の神社へと行列を組んで参拝し、共同体全体によって厄を被う儀礼）など古くからの行事が再編されつつ維持されており共同体結合の要となっている。4 月第一日曜には、集落で 33 歳の年齢を迎えた男女が、世話人の家から行列を組み、

樽神輿や菓子と餅を納めた桶を伴って島の氏神である大島八幡宮に参拝する。行列の先頭にはヒョウゲモン（あるいは裁量人）と称される道化役が立ち、道中歌を歌うが、集まった老人達もそれにあわせて掛け合いを行う。年によっては、ヒョウゲモンは巨大な陽根をぶら下げる。ヒョウゲモンは本来、女性の嫁入り行列の先頭役であったとされる。八幡宮での参拝を済ませると、集まった島の人々に餅撒きを行う。現在、八幡宮での神事の後、皆で大笑する行為が加えられている。平成 4 年の調査時は、この行為は行われていなかったが、神事を司る萩市住吉神社宮司の発案ではじめられた。今回の調査では、平成 25 年 4 月 2 日の祭礼をデジタルカメラで撮影するとともに、ビデオによって撮影・編集し映像記録を作成した。なお萩市大島においては、1992 年より調査を継続しており、関連資料のデータベース化を並行して行った。

以上 1) から 3) の調査資料ならびに、(2) 述べるデジタルアーカイブ化資料を基に、現代の祭り・行事を、「結衆の時・場」・「故郷に対するイメージの再認識と継承・アイデンティティ(自己認識)の形成」・「靈魂観・死後観を含めた心のささえ」という観点からその有意性を検証した。

4) 伝承の内面化にみる伝承主体の心意と歴史認識についての調査

2011 年度より 2014 年度にかけて山口県下関市湯玉浦および大河内・川棚集落調査

湯玉浦、および大河内集落は、15 世紀に大内義隆によって滅ぼされたと伝えられる石川家の居城があったとされる鯖釣山の落城伝説に関わる「森神」が広く展開し、今日もその伝承の再編が認められる地域である。ここでは、伝承主体としての家・個人を単位とした自己経験の内面化を伴う歴史伝承の継承、再構築、創造を検討するための調査を実施した。大河内・川棚集落においては 1990

年より、湯玉浦においては2002年より調査を継続しており、関連資料のデータベース化を並行して行った。

5) 移動、移住にみる伝承主体と伝承の内面化についての調査

2011年度より2015年度にかけて、下関市湯玉浦巨文島移民経験者の聞き書き調査を実施した。下関市湯玉浦は、明治以前より大型定置網である大敷網技術を有した漁民達が、積極的に島根県などに漁場を求めて進出しており、その地域住民との漁業権交渉や網子の雇用など様々なレベルでコミュニケーションを図りながら活動し、その経験は、明治38年の木村忠太郎の韓国巨文島への移住の下地ともなっている。明治から現代にかけて、日本の漁民が外部との接触、進出を如何に果たす中で、母村における伝承を移住した地域において如何に維持、再構築し、あるいは新たな伝承を創造したかを考察するに適した調査地である。同地域においては2002年より継続的に民俗誌作成のための調査を実施しているが、今回の科研に基づき、新たな視点で再調査を行うことにより、25～数年の時間差がある調査資料を対比させて通時的に伝承の位相について考察した。

以上の3, 5にかかわる調査・整理資料から、個人や家にかかわる伝承の内面化について、申請者の従来の研究視点をも踏まえた上で、以下の分析結果を得た。

話者の生活体験を含み込んだ口頭伝承とは、複数の同時代的な人々の多元的な生活体験をも含み込んだ多声的なものである。ここで言う多元的とは、同時代を共に生きる人々のみならず、話者の生活史上で関係性を持った人々や、現在の生活空間を通じて関係性が認識される存在(死者)をも含む。

個々人の生活体験に纏わる語りは、完全に整序化された物語として語られるだけでなく、その体験に纏わる語り、話者の

伝承的な知識や別個の体験に纏わる語りへと連続し、全体として連想による想起の連鎖として物語が形成されて行く。ここでの様々な語りは、そこには、複数の個人、集団による多声的な体験談も含まれ、それが語り手の自己経験や主体的な伝承的知識を核として、その内面で、あるいは他者との会話の中で統合されて紡がれたものである。

話者を伝承主体として捉えた場合、その生活体験は、特定の生活空間上で生じたものに限定されず、生活史上の生活空間・社会的帰属の変遷に対応して紡がれて行く。その人生における生活空間各々の生活体験やそこで得た伝承的な知識が紡がれ語られる。

生活体験は、話者の直接的体験(実体験)のみならず、伝聞による他者体験の間接的体験も含み得る。話者同士の共同行為も更なる解釈共同の枠組みを形成する。

また、既に死亡している他者の存在が、生者に認識され、その生活そのものに影響を与え、新たな生活体験や生活上の実践を生み出す場合もある。死者の存在は、実体としてでは無くあくまでそれを信じる者の認識として存在するものであるが、それが「存在する」と認識されることにより、あたかもそこに、喜怒哀楽の感情を有した生者が居り、それを相手とするかのごとき行為実践(供養行為)が行われる。その実践の成立には、地域の民間宗教者の関与が大きな影響を与えている。

この場合、死者霊は生者と共時的な時間に存在していると認識されるが、これは過去の時間領域が現在の時間領域に接合し、影響を与える状況を生み出す。口頭伝承における時制は、今を生きる人々の現在の時間のみならず、かつて過去を生きた人々の時間へも伸展するものである。かつて、存在したとされる人々の時間が、直接的に現在の生者の生活時間へと結びつけられ、意味が付帯される。

.以上の過程を経ながら、様々な機会に
伝承者の内面において内省的な統合と物語
としての再構成が行われる。これは、調査の
場に限られたことではなく、何らかの生活史
上の事件が生じた際や、それについて、他者
や宗教者と会話をを行った際にも生ずる。

.発話の場においては、その場のコンテ
クストの影響や、相手との解釈共同行為の影
響を受けつつ統合と物語としての再構成が
行われ、語りとして表現される。その際には
解釈共同行為のベースとなる解釈枠のすり
合わせが行われ共有される。

.口頭伝承は、伝承主体がその生活史上
帰属してきた社会の歴史・社会・政治的状況
をコンテクストとし、自己・他者の生活体験
を統合・物語化する過程を経た、その心意的
世界の表現である。現在の時間を過去の時間
へと結び付け、内面化しそれを新たな物語と
して主体的に再構成して行く行為でもある。

.話者の語りは、主体的意思を持って行
われるものであり、単に過去へと内省的に遡
及して行くばかりのものではない。伝承者の
生活経験の中で紡がれた自身が存在する世
界の認識の根本に神仏の存在を見る思考の
あり方を指摘することが出来る。

(2)映像・録音資料データベースの作成

1) フィルム資料のデータベース化

補助事業の目的の一つである、1980年より
各地区の民俗調査において研究代表者が撮
影したフィルムのデジタル化、および、その
データベース化については、本研究課題に特
に関わるものを優先した。デジタル化したア
ナログフィルムの総数は以下の通りである。

35mm スライドフィルム 1,585 枚

35mm スリーブフィルム 4,500 枚

2) デジタルビデオテープ・8mm ビデオテー プのデータベース化

デジタルビデオテープ・8mm ビデオテー
プのデータベース化については、291本、約385
時間のテープについて実施した。デジタル化
したデータのサイズは2.7TB、デジタルビデオ
による記録を含めると約5TBである。

3) アナログ録音データのデータベース化

アナログ録音データのデータベース化に
ついては、1981年以降のカセットテープとマ
イクロカセットテープによる録音データ、な
らびに1990年以降のデジタルマイクロテー
プレコーダーによる録音データ、1997年以降
のMDディスクによる録音データについて、
データベース化した。アナログ化したファイ
ルサイズは約3GB、2001年度以降のICレコ
ーダーによる録音ファイルを含めると
30.5GBである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計3件)

徳丸亜木、民俗と内面化についての基礎的
考察一、歴史人類、査読有、41号、2013、
pp.23-61

徳丸亜木、口頭伝承の動態的把握について
の試論、現代民俗学研究、査読無、5巻、2013、
pp.15-31

[学会発表](計1件)

徳丸亜木、民俗と内面化についての基礎的
考察、2011年10月2日、日本民俗学会第63
回年会、滋賀県立大学(滋賀県彦根市)

[図書](計1件)

徳丸亜木、伝承主体における伝承の主体
化・内面化についての民俗学的研究 平成23
~26年度科学研究費補助金 基盤研究(C)
一般 研究成果報告書、アイネクスト、2015、
pp.1-150

6. 研究組織

(1)研究代表者

徳丸 亜木 (TOKUMARU, Aki) 筑波大学・
人文社会系・教授

研究者番号：23520977